コロナワクチン、一体何回打てば終わるのか

2022/9/22 編集委員　矢野寿彦　日本経済新聞

重症化」予防から「感染・発症」予防への大きな方針転換といえよう。12歳以上を対象にしたオミクロン型ワクチンの接種が、高齢者らを皮切りに始まった。政府はこの冬に到来が予想される「第8波」の流行を少しでも小さくしようと「1日100万回」（岸田文雄首相）の接種目標を掲げ、年内までに希望者全員に打ち終えたい意向だ。

世界でも前例の少ない試み

しかし、新ワクチンの接種を全世代に広げるのは世界でもあまり例のない、先をゆく試みである。3回目、4回目接種が道半ばのなかで前のめりになっていないか。そして、改めて素朴な疑問が浮かぶ。追加接種に4回目、5回目接種。新型コロナウイルスのワクチンは一体何回打てば終わりを迎えるのか。

新ワクチンは米ファイザーと米モデルナがそれぞれ手掛ける「2価ワクチン」。従来型とオミクロン型「BA.1」の2タイプのウイルスに対応しており、専門家はこう呼ぶ。

厚生労働省が今月12日、特例承認した。ファイザー製だと12歳以上、モデルナ製だと18歳以上で、初回接種（1、2回目接種）を終えて5カ月以上たっていれば、3回目、4回目接種の有無に関係なく打つことができる。

新ワクチンのデータは限定的

政府が期待を寄せるのは、感染力が強いオミクロン型に対する感染や発症の予防効果だ。米食品医薬品局（FDA）諮問委員会に報告されたデータによると、従来のワクチンに比べ、「BA.1」の中和抗体の値が有意に上がることが確認された。「第7波」の主流である「BA.5」に対しても上昇が見られたという。

ただ、いまのところデータ数が限られている。中和抗体の値が上がったとしてもどれほどの感染・発症効果があり、長続きするかもまったくわかっていない。2、3カ月の短期間で終わる可能性も大きい。

欧米などいくつかの国で新ワクチンは薬事承認されてはいるが、日本のように全世代に追加接種を決めた国は米国などわずかだ。

今年の春、政府は59歳以下の現役世代や若者、子どもへの4回目接種を見送った。ワクチンは感染を抑え込む切り札にはならないと判断、接種の意義を個人の重症化予防に絞り込んだ。

オミクロン型対応ワクチンとはいえ、百八十度方針転換したのなら、社会を守るための「秋の追加接種」であることをきちんと説明しないと、国民の理解はなかなか得られないだろう。

それにしても日本のワクチン接種戦略はちぐはぐが目立つ。感染・発症予防というのであれば、今、一番必要なのは介護施設などで暮らす高齢者だろう。第7波では感染爆発した割に重症化した人が大きく増えずに死者数だけが増大した。もともと体力の衰えた寝たきりの人や重い持病を抱えた人が、感染をきっかけに、コロナによる肺炎を経ずに亡くなるケースが多かった。

しかし、高齢者のうち約7割が既存のワクチンによる4回目接種を完了している。今月ようやく終えたばかりの人も少なくない。厚労省は接種間隔を5カ月から3カ月をメドに短くする方向で検討しているが、だとすると、新たな疑問もでてくる。そんなに短い間隔で事実上の5回目接種を実施して大丈夫なのか。

さらに事をややこしくするのが「BA.5」に対応した改良ワクチンが国内でもまもなく使えそうだということだ。ファイザーは薬事承認を申請済みで、モデルナも近く追随する。

「年内、11～12月までには接種会場に届けられると思う」（モデルナ日本法人の鈴木蘭美社長）。だとすると、この改良ワクチンが出てくるのを2、3カ月待ち、新ワクチンを「打ち控え」する人が出てきてもおかしくない。

「BA.1」ワクチンの接種方針を了承した厚労省のワクチン分科会でも委員から「BA.5」ワクチンとの使い分けについて国はどう考えているかをただす質問が出た。が、厚労省は、今回の審議は「BA.1」ワクチンに限定したものであることを理由に明確な答えを示さなかった。

新型コロナの流行がパンデミック（世界的大流行）からエンデミック（一定期間で繰り返される流行）へと移っていくなか、米国では中長期的なワクチン接種をどうしていくかの議論も始まっている。今月上旬、ホワイトハウスの新型コロナ対策チームは、インフルエンザの予防接種のように1年に1回打つ可能性があるとの考えを示した。

「頻回接種」の悪影響予想できず

目先の対応にドタバタするのでなく「ウィズコロナ」にあったワクチン接種戦略がいま、日本にも必要なのではないか。

メッセンジャーRNA（mRNA）というコロナ前にはまったく実績のない最新医療技術を使ったワクチンを半年足らずの短い間隔で「頻回接種」することに、免疫学者や臨床医からも不安の声があがる。理論的には問題がないとされるが、人間の体は不確実性のかたまりのようなものだ。中長期的な健康への影響はだれもが予想しえない。

全世代を対象にコロナのワクチンを半年あるいは1年に1回打ち続けていくというのであれば、むしろインフルエンザで実績のある不活化ワクチンなどの既存技術の方が安全・安心につながるだろう。ただ、国内発コロナワクチンの実現はまだ見通しがたっていない。

この2年、日本のワクチン接種戦略は迷走し続けた。調達を急ぐあまり海外メーカーに振り回された感が拭えない。自前の国産ワクチンを手にすることができなかった「ワクチン敗戦」の影響がいまなお尾を引いている。